雪・雪・雪

岩見沢市医師会 会長　竹内　文英

岩見沢は豪雪地である。９年前の記録的な大雪の時も、全国ニュースで何回も放映されたので知名度は高い。今年もその当時に匹敵する降り方をしており、今後の降り方が多ければ記録更新になりかねない。

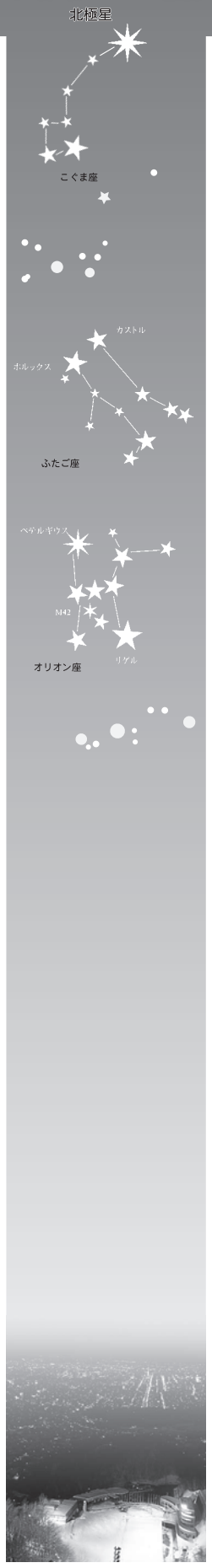
昨年11月24日から今年１月21日まで延々と雪が降り続いた。12月に雪の降らなかった日は８日間、１月はたったの５日間で、累積降雪量は１月21日で624cm最大積雪深は165cm、９年前の記録的大雪の時は累積降雪量666cm最大積雪深200cmであった。ちなみに札幌は累積降雪量168cm積雪深41cmでうらやましい限りである。

12月中旬から除排雪が間に合わず交通は麻痺状態である。幹線道路は1.5車線、縦通りは１車線となりバスは運休を繰り返す。９年前の大雪の経験からバス路線は最優先で除排雪を行うが３日間降雪が続くと道路がすり鉢状になり、またバスは運休となる。

写真は自宅の裏玄関前から空を見上げた写真であるが、両側から雪庇で覆われ見えるはずの空が１/３しか見えない状態である。

岩見沢市民は１日２回の除雪に追われ、タクシーを呼んでも１～２時間来られない状態になった。例年であれば年末年始は感染症もあり病院は混雑するが今期は閑散としている。さらに飲食街は閑古鳥が例年になく大きな声で鳴いている。現在新型コロナウイルスが猛威を振るっているが、大雪のため飲食の機会が極端に減ったことが市中感染を防いでいるように思われる。今年に限っては大雪に感謝なのだろうか。

玄関



低速運転

空知南部医師会 会長　梶　　良行

ぼくが18歳のころ、鉄道の旅は“のんびり”していた。栗山駅から夕張鉄道のディーゼル列車に乗車し、北海鋼機前駅でバスに乗り換え、札幌駅へ。ここから列車で約５時間かけて函館駅に到着すると、休む間もなく急ぎ足で青函連絡船に乗り込み、約４時間かけて津軽海峡を渡りきる。この間、船酔いで苦しむ。青森からは寝台列車で約10時間かけて上野駅にたどり着くのだが、計算してみると、栗山の自宅から新宿の学生寮まで約24時間かかっていたことになる。現在、所要時間は約３分の１に短縮され、同じ距離を約８時間で行けるようになった。飛行機を使えば更に速い。

遠く離れた土地に短時間で移動できることは便利だが、ゆっくりとした旅にも捨てきれない良さがある。車窓からの景色を楽しむこともその一つだが、トンネルばかりのルートでは窓に映る自分の顔しか見られない。鉄道ばかりではない。札樽自動車道も走ってみると分かるが、美しい積丹の海を走行中に見られる区間はほとんど無い。しかし、問題は景色ばかりではない。新幹線や高速道路ができるたびに寂れる町が誕生する。道路がショートカットされるために人の流れが変わるからだ。また、大量の情報と人が瞬時に移動することには大きなリスクも伴う。COVID-19感染症のパンデミックもその一つに違いない。

ぼくは時の流れのあまりの速さに疲れたようだ。振り返れば、回し車の中のハムスターのように走り続けてきた。これからは移りゆく季節を楽しみながら、「低速運転」で残された時間を“ゆっくり”と生きたいと思う。安寧な世界を夢見て、切にそう思う。

1971年、某石油会社のコマーシャルで、マイク眞木も歌っていた。

気楽に行こうよ　俺たちは
あせってみたって　同じこと
のんびり行こうよ　俺たちは
なんとかなるぜ　世の中は